

戦国期における「境目」と国衆の研究：北部九州政治史を素材として

佐藤，凌成

<https://hdl.handle.net/2324/7443215>

出版情報：Kyushu University, 2025, 博士（文学），課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 佐藤 凌成

論文名 : 戦国期における「境目」と国衆の研究
—北部九州政治史を素材として—

論文内容の要旨

本論文は、戦国期（1467～1587）の「境目」（大名権力が交錯する境界領域）とそこに存在する国衆に注目する視角から、当該期の政治史や地域的特性を解明することを目的とするものである。分析にあたっては、大名・国衆の関係が特に顕著に表れる北部九州、とりわけ豊前・筑前（豊筑）地域をフィールドとして設定し、大きく2部構成とした。

第一部「筑前麻生氏の研究」では、筑前国衆であり室町幕府奉公衆の家格を有する麻生氏を取り上げて、戦国期を通じた周辺勢力との関係の変化を分析した。

第一章「麻生氏の系譜関係について」では、応仁・文明の乱を契機に麻生氏惣領家（上総系麻生氏）が大内氏との関係を強めたが、明応の政変後には庶家（兵部系麻生氏）が大内氏と密接な関係を築くといった推移を明らかにした。また、兵部系麻生氏が基本的に在国して活動を展開する一方で、上総系麻生氏は在京での活動を中心としており、幕臣と大名やその家臣、国衆との関係を仲介する役割を果たしていたことを指摘した。本章においては兵部系麻生氏の系譜関係の復元案を提示したが、これは続く第二章・第三章の前提としても重要である。

第二章「麻生氏庶流の活動と存在形態」では、柳川古文書館所蔵「麻生家文書」の分析を通して、兵部系麻生氏の庶流（下総系麻生氏）が大内氏のもとで筑前那珂郡の岩門城・亀尾城の城督を務めたことを明らかにしたうえで、下総系麻生氏が城督の地位を基盤に所領の集積と地域への定着を進め、独自の領域支配を形成したことを指摘した。

第三章「十六世紀後半における麻生氏と大名間抗争」では、大内義長期に活動する麻生鑑益が兵部系麻生氏の人物であり、陶氏・大友氏と密接な関係にあったことを明らかにしたうえで、鑑益の死後、その後継者である鎮里が鑑益旧臣と大友氏によって擁立されていく過程を分析した。一方で、鎮里と対立した麻生隆実は毛利氏と結びつき、毛利氏が九州から撤退した永禄末年以降も、大友氏の軍事活動への牽制など、九州への楔としての役割を担っていたことを明らかにした。

第二部「十六世紀後半の大名領国周縁における国衆の研究」では、毛利氏や大友氏、島津氏といった諸大名が北部九州をめぐる抗争を展開した永禄年間から天正年間を検討時期とした。

第一章「戦国期毛利氏の九州進出と国衆の動向」では、大内氏滅亡後の豊筑地域の国衆の動向を解明していく作業を通して、大友氏に逐われ毛利領国に亡命していた筑前国衆秋月種実らの本領帰還および毛利氏の門司城獲得が永禄2年(1559)の出来事であることを確定するとともに、このときに帰還した国衆らが、その後の毛利氏の九州進出の受け皿となったことを指摘した。

第二章「大名の「境目」進出における長野氏の動向」では、豊前国衆長野氏を素材に、「境目」に存

在する国衆と大名との関係を検討した。大名は「境目」への方策に長野氏を利用しており、特に大友氏は永禄末年以降、規矩郡に高橋氏、京都郡に長野氏を配置することで領国防衛ラインを構築したことを明らかにした。また、天正6年(1578)末以降、長野氏は周辺国衆と連合し、豊前国における中心的国衆としての地位を得るが、一方では依然として毛利氏や龍造寺氏といった大名勢力との関係も維持することで、常に情勢を見極めながら存続への道を模索していたことを指摘した。

第三章「天正年間の九州情勢と秋月氏」では、特に天正年間における秋月氏と島津氏との関係の分析を通して、当該期の九州情勢に秋月氏を位置づけた。秋月氏は島津・龍造寺両氏間の和平仲介を通じて、「九州之守護」たる島津氏とその「幕下」に属する秋月・龍造寺両氏という構図をつくり、そのうえで島津氏の軍事力を大友氏へ向けるよう積極的に進言することで、自身の安全を企図したと結論づけた。また、秋月氏の九州平定軍への降伏は、島津氏の豊後撤退によって軍事的後ろ盾を失ったことが要因であると評価した。

補論「史料紹介 高野山成慶院『秋月家供養帳』」では、高野山の子院である成慶院に伝わった供養記録である『秋月家供養帳』を翻刻・紹介した。本史料には、秋月氏をはじめとする北部九州の国衆や博多町人、小倉町人をはじめとする豊前・筑前両国の住人など幅広い層の供養記録を多数含んでおり、史料価値が高い。本史料を翻刻し紹介することにより、一次史料に乏しいとされる中世北部九州の研究に新たな素材を提供した。

以上の2部6章の考察にもとづき、「境目」としての豊筑地域の地域性と、そこに存在する国衆の特質について総括した。

豊筑地域の「境目」の変動を考えるうえで最大の画期は、毛利氏の進出である。国衆層の動向に起因して毛利氏の九州進出が開始したことで、大名間で画定していた境界線は打ち消され、豊筑地域に「境目」が生じた。毛利・大友両氏の抗争期においては、大名側が「境目」の縮小、解消による勢力の均衡を志向している一方で、国衆の動向や国衆周辺で形成された対立構造が「境目」の発生や拡大の要因となっていた。国衆層の動向に起因して、それに連動して大名が活動を展開することで、豊筑地域における「境目」は変動していた。

一般的に国衆は高い自立性を有すると認識されており、「境目」に存在する国衆は特にその傾向が強いとされるが、本論文で分析対象とした国衆は、いずれも大名からの完全な自立は志向しておらず、概して政治的・軍事的自立性は低いと結論づけた。しかし、彼らが繰り広げた一族内訌や、存立のためにとった行動に大名が引き込まれていき、結果として「国郡境目相論」＝大名間の領土紛争へと進んでいった側面があることも確かである。戦国期の政治史を正確に捉えるためには、大名の主体性を過度に評価することなく、国衆側の動向が大名の動向を規定する側面にも目を向ける必要がある。